

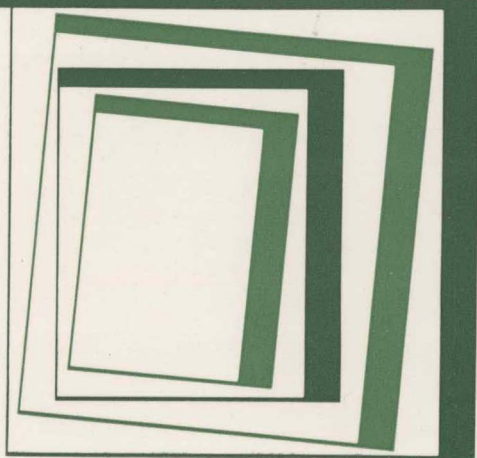
遊部 久蔵 小林 昇 杉原 四郎 古沢 友吉 編

講座 経済学史

IV

編集者代表 古沢 友吉

マルクス経済学の発展



同文館

遊部 久蔵 小林 昇 杉原 四郎 古沢 友吉 編

講座 経済学史

IV

編集者代表 古沢 友吉

マルクス経済学の発展

同文館

〈編集者略歴〉

ふるさわ ともきち
古 沢 友 吉

1925年 横浜に生まれる
1948年 東京商科大学（現一橋大学）卒業
現 在 横浜国立大学教授
主 著 『マルクス経済学入門』
『資本論の展開』『独占資本論への道』
『現代資本主義の構造分析』『現代市民社会全書』（全5巻）（いずれも編著，同文館）

《検印省略》

昭和52年4月25日 初版発行

略称—経済学史Ⅳ

『講座 経済学史』

Ⅳ マルクス経済学の発展

編集者 古 沢 友 吉

発行者 中 島 朝 彦

発行所 同文館出版株式会社

東京都千代田区神田神保町 1-41 〒101

電話（東京）294-1801～6 振替東京0-42935

© T. Furusawa

印刷：藤本綜合

製本：トキワ

Printed in Japan 1977

『講座 経済学史』の刊行にあたって

近年、わが国の経済学史研究上の成果にはきわめて注目すべきものがあり、ひろく多角的・専門的な諸業績が数多く公表されている。しかしこんにち、大きく経済学史の全体像を——とりわけ、初学者をも対象として——的確かつ平易にうきぼりにするという点では、いまだかならずしも満足しうる状況にはおかれていないものがあるように思われる。そこで私たちは、版元・同文館からの要請にもとづき、ここに先人・先達の研究諸成果をできるだけ批判的・内在的に継承・発展させるという基本的姿勢のうえにたって、本講座の編集・刊行を意図することになった。

もとより、国の内外にわたって膨大な諸文献を整理・点検し、高度の学問的水準を保ちながらも、平明な叙述で経済学史の鳥瞰図を描き出すということは、けっして容易な作業ではない。だが、幸い、経済学史上の様々な専門領域にわたって、学界各位のご協力とご鞭撻をえることにより、この講座が多少なりとも所期の目的を達成することができるならば、私たちの喜びはこれにすぎるものはない。

なお、本年は、アダム・スミス『諸国民の富』(1776年)の発刊200年にあたっている。そして、これを記念するいろいろな集いや出版が世界・各地で企画実現されているようである。といって、こうした記念行事に安易にあやかるともりはないが、本講座がそれなりに、アダム・スミスにたいするささやかな一モニュメントとしての意味あいをもつことがゆるされるならば、これまた私たちの望外の幸せである。

1976年6月

『講座 経済学史』責任編集者

遊部久蔵 小林 昇 杉原四郎 古沢友吉

目 次

序 説	3
1 はじめに——基礎的視角	3
2 「マルクス経済学の発展」をたどって	7
3 おわりに	18
第 1 部 初期帝国主義段階のマルクス経済学	21
第 1 章 帝国主義発達小史	
——帝国主義認識の発酵期を中心に——	21
1 帝国主義＝「前近代の遺制」説 (23)	
2 SPD における帝国主義認識の地殻変動 (30)	
3 帝国主義＝「資本主義の必然的政策」説 (36)	
第 2 章 修正主義論争	
——いわゆる崩壊理論をめぐる——	45
第 1 節 ベルンシュタインの崩壊理論批判と修正主義論	47
第 2 節 正統派の反撃と崩壊理論の擁護	54
1 クーノの「崩壊理論」 (55)	
2 ローザの『社会改良か革命か』 (60)	
3 カウツキーの『ベルンシュタインと社会民主党綱領』 (62)	
第 3 章 『資本論』体系の発展——むすびにかえて——	68
第 2 部 爛熟期の帝国主義段階とマルクス経済学	69
第 1 章 帝国主義論の諸潮流	69
第 1 節 帝国主義と諸潮流の分化	69
第 2 節 過少消費説にもとづく世界市場論的な帝国主義論	70

第3節 資本蓄積論的視角に立つ帝国主義論の流れ……………	77
第2章 帝国主義と金融資本 ……………	80
第1節 『金融資本論』の成立まで ……………	80
第2節 金融資本と資本蓄積機構……………	83
第3節 帝国主義と金融資本……………	88
第3章 帝国主義と資本蓄積 ……………	93
第1節 ローザ帝国主義認識の基礎視角……………	93
1 『ポーランドの産業的發展』、『社会改良か革命か』の視角 (94)	
2 『経済学入門』の提起した問題 (98)	
第2節 『資本蓄積論』の帝国主義認識 ……………	102
1 独自の資本主義観 (102)	
2 『資本蓄積論』の論理構成と再生産表式論解釈 (103)	
3 『資本蓄積論』の帝国主義認識 (106)	
第3部 帝国主義論の古典的体系の確立……………	109
はじめに ……………	109
第1章 「段階」としての帝国主義……………	115
第2章 段階規定の基礎範疇としての「独占」……………	117
第1節 独占原理と独占の諸形態……………	117
第2節 生産の集積と独占体の形成……………	118
第3節 金融資本規定の展開……………	121
第4節 世界体制における「独占」……………	124
1 資本の輸出 (125)	
2 国際的独占体の形成 (127)	
3 世界の領土的分割 (130)	
第5節 独占資本主義の内的矛盾……………	132
第3章 帝国主義の歴史的地位 ……………	136
第1節 独占のもとでの停滞と腐朽……………	136
第2節 社会主義への過渡段階としての帝国主義……………	139

第4部 現代資本主義論の展開	143
第1章 現代資本主義論の歴史的源流	143
第1節 現代資本主義論の顔	143
第2節 人民資本主義論の生成	147
第2章 現代資本主義論の巨匠的群像	155
第1節 社会民主主義的視点からとらえた資本主義の運命 ——J. ストレイチャー	155
第2節 「創造的破壊」を基軸とする資本主義の衰減 ——J. A. シュンペーター	159
第3節 「新しい産業国家」への道をめざす資本主義の動向 ——J. K. ガルブレイス	162
付 論	169
 第5部 社会主義計画経済理論の生成と発展	173
はじめに	173
第1章 マルクス主義と社会主義経済論	176
第1節 マルクス＝エンゲルスの社会主義経済観とその特徴	177
第2節 プハーリンと「経済学消滅論」	178
第3節 ネットと過渡期の経済理論	182
第4節 「移行期」の終了と計画論の課題	184
第2章 計画理論の模索	187
第1節 20年代——「論争の季節」	188
第2節 「冬の季節」の計画論	194
第3節 新たな計画理論への試行	196
1 「部門連関バランス」の作成 (199)	
2 最適計画化論 (200)	
第3章 集権制への批判と分権制の模索	202
第1節 情況	202
第2節 集権制とその欠陥	204

1 「計画経済」と「指令経済」の同一視	(204)
2 商品・貨幣関係と価値法則	(205)
3 「計画経済」のなかの「自然発生性」	(206)
第3節 「分権化モデル」	208
第4節 「改革」をめぐる政治と経済	209
文献案内	213
人名索引	223

『講座経済学史』

IV マルクス経済学的发展

序 説

1 はじめに——基礎的視角

マルクス経済学は、一定の生産様式を基礎として形成される社会経済構成体（または経済的社会構成体、あるいは簡単に社会構成体）を、それ自身の内的動因によって発展する歴史的個体としてとらえる歴史科学である。したがって、それは、現実の社会構成体をそれ自身の生成・発展・没落の過程をもつ歴史的特殊としてとらえる危機の科学でもある。じじつ、この講座のⅢ「マルクス経済学の生成と確立」は、マルクスの思想と学説の体系を、その初期（マルクス主義の三つの源泉の統合過程）、中期（「経済学批判」体系の形成と発展）、後期（「資本論」体系の確立）にわたって展望するなかで、このことを端的に性格づけている。

いいかえると、マルクス経済学は、資本主義社会という歴史的な枠のなかで、この社会を肯定・擁護する古い思想と真正面から対立し、これを批判・克服することをつうじて、新しい社会への移行をおしすすめるための新たな思想をきざぎあげた。それとともに、マルクス経済学は、さまざまな内的矛盾にみちた古い資本主義社会が、社会主義社会という新しい社会へ移行する歴史の必然性を法則的に明らかにし、あわせて、このような移行の法則性を正しく認識することのできる、強靱で全面的に発達した勤労大衆の成長の必然性を歴史的にも・論理的にもはっきりとえがきだした。この意味で、それは、すぐれた歴史の科学であると同時に、また危機の科学なのである。そして、このようなマルクス経済学の基本的性格は、この第4巻をつうじて内容的により鮮明なものとなるであろう。

とはいえ、私たちは、これまでのマルクス経済学によって、ひろく資本主義一般についての問題がすべて解明しつくされているなどとは考えない。また、そのうえにたつて、マルクス経済学の諸命題を機械的に現実の諸事象に適用するといったような教条的立場をとるものではない。この点について、私たちはあえて、マルクス主義の後継者ヴェ・イ・レーニンのことばをかりることにしよう。すな

わち、レーニンは、つとに 1899 年に『ラボーチャヤ・ガゼータ (労働新聞)』のために執筆した小論文「われわれの綱領」のなかで、つぎのようにいっている⁽¹⁾。――

「われわれは完全にマルクスの理論の基盤にたっている。この理論こそ、はじめて社会主義を空想から科学にかえ、この科学の確固たる原理をうちたて、また、この科学をさらに発展させて、すべての細目にわたって仕上げるにあたり、すすむべき道をあらましめしたものである。」しかし、「われわれはマルクスの理論を、けっしてなにか完成された、不可侵のものとは考えていない。その反対に、この理論は、社会主義者が生活にたちおくれないならば、こんごさらにあらゆる方向に前進させなければならぬ一つの科学のかなめ石をおいたにすぎない、とわれわれは確信している。われわれは、……マルクスの理論を自主的に仕上げるものがとくに重要である、と考える。というのは、この理論は、一般的な指導的な諸命題を提供しているだけで、それらの原理は、個別的には、イギリスにたいしてはフランスとちがったふうに、フランスにたいしてはドイツとちがったふうに、ドイツにたいしてはロシアとちがったふうに、適用されるからである。」

たしかに、マルクスとレーニンとのあいだには時間的・空間的な時代のへだたりがあった。そしてまた、レーニンと私たちとのあいだにも同じように時代のへだたりがある。この時代のへだたりがあればこそ、マルクスの思想と学説はレーニンにとって、またマルクスやレーニンのそれは私たちにとってそれぞれ「古典」としての意味合いをもつ。そのかぎりでは、当面、私たちは、いくつかの若き古典をもふくめて、先人の歴史的遺産をできるだけ批判的・内在的に継承・発展させていくための大きな作業をつみかさねなければならない。つまり、さしあたって私たちは、マルクス経済学の創造的発展を念願するなかで、「資本論」体系の確立以降の「マルクス経済学の発展」を総合的に整理・点検するという険しい道を歩まなければならないわけである。

もっとも、このような視角で「マルクス経済学の発展」をたどるということになれば、ただちに思想的・理論的諸問題がうかびあがってくることはいうまでもない。そして、これを集中的に表現するものの一つに、マルクス『資本論』とレ

(1) ソ同盟共産党中央委員会付属マルクス＝エンゲルス＝レーニン研究所編——マルクス＝レーニン主義研究所訳『レーニン全集』第4巻（大月書店、1954年）、224－26ページ参照。

レーニン『帝国主義論』との論理的関連についての問題があるし、これに関する注目すべき邦語文献も数多く公けにされている⁽²⁾。しかし、私たちは、この『資本論』から『帝国主義論』への継承性にかかわる問題については、本講座Ⅲにおける基本的姿勢の流れのうえにたって、さしあたり、つぎのような見解をしめすだけにとどめたい。――

いうまでもないことであるが、『資本論』と『帝国主義論』とは機械的に直結または連続しているものではない。また、両者はたんに並列的な著作としてあつかわれるべきものでもない。だからといって、『資本論』が資本主義に関する一般理論であり、『帝国主義論』が資本主義の特殊発展段階の理論であるというような区別だてを安易に首肯することはできない。

明らかに、マルクスの『資本論』は、直接には19世紀の産業資本の時代をとりあつかったものであり、また、レーニンの『帝国主義論』は、すぐれて20世紀の独占と帝国主義の支配の時期をとりあげたものである。そのかぎりでは、『資本論』を産業資本主義段階の理論として、また、『帝国主義論』を独占資本主義段階の理論として特質づけることはそれなりの意味がある。しかし、マルクス『資本論』は、およそ資本主義一般についての基礎的・体系的原理をしめすものであり、それは、資本主義の最高の段階としての帝国主義（その経済的本質からみて独占資本主義）の時代においても、資本主義そのものの一般理論としての性格を決してうしなうものではないはずである。また、レーニン『帝国主義論』は、おしなべて帝国主義段階に対応する特殊理論をうちだしたものであるが、それが資本主義それ自体の原理の発展による特殊な歴史的段階の理論であるかぎり、その原理的体系性において『資本論』とまったく無縁ではありえないはずである。

つまり、マルクス『資本論』は、レーニン『帝国主義論』をつうじて、その一般理論的な性格をより補完・拡充されるのであり、また、レーニン『帝国主義論』は、マルクス『資本論』にささえられることによって、その特殊理論的な性格をより検証・強化されることになるのである。いいかえれば、『資本論』と

(2) この巻の「文献案内」でしめす「帝国主義論」関係の文献は、そのすべてが直接・間接に本文で指摘した問題とかかわりをもつものであるが、ここではそれらを総括的に整理・検証している代表作として、入江節次郎・星野中編『帝国主義研究Ⅰ 帝国主義論の方法』（御茶の水書房、1973年）をあげておく。この本をつうじて、読者は当面の文献の所在を包括的に知ることができるとは必ずである。

『帝国主義論』とのあいだの往復運動こそが肝要なのであり、『資本論』→『帝国主義論』という短絡的な理解ではなく、『資本論』⇄『帝国主義論』という螺旋的な把握こそが必要とされるのである。これによって『資本論』を『帝国主義論』とともに、また、『帝国主義論』を『資本論』とともに全体化していくことが可能になると思われるが、このさいに両者を結合していく基本的な脈絡は、なによりもまず、マルクスの「経済学批判」体系のプラン——「資本、土地所有、賃労働、国家、外国貿易、世界市場」からなる研究プラン——のとくに後半3項目を、資本主義の歴史的な特殊発展段階にふまえて具現化・内容化していくことに求められなくてはならない⁽³⁾。

もちろん、マルクス経済学の創造的発展を念願するということであれば、それはたんに古典への学史的接近ということだけでみたされうるものではない。その願いを実現させるためには、すすんで危機的状況下の現代帝国主義、世界資本主義、日本資本主義などに関する構造的な現状分析が必要となるであろう。いわゆる国家独占資本主義下の政治と経済の癒着・結合関係や、国際金融資本の現実的運動とそれを媒介とする世界経済・日本経済の相互作用関係などの分析をはじめとする一連の現代的諸問題——たとえば、世界経済についていえば、国際通貨危機と世界的インフレ、多国籍企業と政治的・軍事的同盟、資本主義的「経済計画」と社会主義圏との経済競争、低開発発展途上国の経済開発・工業化・不均等発展などの理論的諸問題、また、日本経済についてみれば、日本国家独占資本主義の進展と日米経済関係の緊密化、技術導入、過剰生産、インフレ、物価、低賃金、公害、福祉、教育、労働組合運動と民主主義運動などに関する切実な諸問題——との対応が、ここに大きくマルクス経済学の現代的課題としてうかびあがってくることになる⁽⁴⁾。

しかし、このためにも、いや、このためにこそ、「古典と現代」とのあいだには一定の時代のへだたりがあることを主体的にうけとめるなかで、「マルクス経済学の発展」を学史的に解明していく意義がある。でない、と、権威ある古典に対

(3) このような考えをまとめるにあたって、私はつとに、種瀬茂・松石勝彦『「資本論」100年とマルクス経済学』（『経済学史学会年報』第7号、1969年11月）から示唆的教示をうけている。

(4) このような現代的課題に対応するにあたっては、たんに経済学の領域内にとどまっているだけでは事足りない。それは、基本的に経済学を土台として、政治学、法学、社会学、教育学、さらには工学、農学などの現代諸科学の総合的な動員と連携を必要とすることになるであろう。

する古い解釈学的態度や、それにもとづく訓詁的な機械的適用の姿勢などが、いたずらに「現状分析」のなかに蔓延するようなおそれさえも生じがちである。明らかに、現代社会を解剖するにあたっては、基礎的・本質的に、ひろく社会体についての体系的な生理学・解剖学を体得しておかなくてはならない。

2 「マルクス経済学の発展」をたどって

ところで、マルクスの『資本論』が経済学史上の画期的な一大文献であることはいうまでもないが、まえにもふれたように、そこにしめされた経済学体系そのものは、おおよそ自由競争時代の世界資本主義を対象としたものであった。そこで、1870年代を境として世界資本主義が産業資本の時代から独占資本の時代にはいり、とりわけ19世紀の末期から20世紀の初頭にかけて決定的に帝国主義の時代が生みだされるようになると、それに応じてマルクス経済学は新しい展開をはじめ、資本主義の新たな発展段階に照応した、新たな歴史的論理体系を形成する道を歩むこととなった。そして、この巻は、このような「マルクス経済学の発展」を、いいかえれば現代帝国主義論史を総括的にとりあげるものであり、以下、この本の構成にそって、その内容を要約的にとらえておくことにしよう⁽⁵⁾。

第1部「初期帝国主義段階のマルクス経済学」は、その第1章を「帝国主義発達小史」にあてている。これは、ヒルファディング『金融資本論』(1910年)を分水嶺として、帝国主義に関する論脈を、1910年以前の帝国主義認識の発酵期と1910年以降の帝国主義論の本格的確立期とに区分する基本的姿勢のうえにたっ

(5) もっとも、マルクス＝エンゲルスのあいつぐ世界とともに、初期帝国主義段階におけるマルクス経済学は、おしなべて不妊症的・不生産的狀態におかれていたともいわれている。そのおもな原因としては、(1)資本主義の本質的な批判・分析は、すでにマルクス＝エンゲルスによって基本的になしとげられていたということ、(2)資本主義の新たな発展に対応した新しい論理体系の形成の気運がもたらがるためには、帝国主義段階それ自体の十分な成熟が必要であったということ、(3)当時の正統派マルクス主義陣営は、もっぱら公式主義的・教条主義的態度に終始し、しかも同じ陣営内に台頭した修正主義への応戦のためにその精力を多分に消耗していたということなどをあげることができる。

しかし、このような状況のなかにあっても、1899年には、マルクス以後における農業問題についての最初の組織的な科学研究といわれる、カール・カウツキーの『農業問題』(向坂逸郎訳・上下・岩波文庫、1946年)や、また奇しくも同じ年に、古典的名著の聞こえ高い、ヴェー・イ・レーニンの『ロシアにおける資本主義の発展』(前掲、『レーニン全集』第3巻〔大月書店、1954年〕)などが公けにされて、これによりマルクス『資本論』体系の適用に新しい分野が開拓されるにいたったことを忘れてはならない。

て、当面、その前期にスポットをむけたものである。

このさいに、帝国主義認識の発酵期を本質的に規定する現実的基盤は、なによりもまず、ドイツ社会民主党（以下、SPD と略称）内部の二つの路線的対立に求められている。すなわち、1900 年の SPD・マインツ党大会における「世界政策についての決議」をめぐる展開された、シェーンランクとレーデブーアとの論戦がそれである。前者は、当時におけるドイツ帝国主義の特殊性に着目して、帝国主義を、ドイツの政治体制をなお支配していた前近代的遺制（絶対主義体制）の利害政策としてとらえるものであり、後者は、帝国主義政策と資本主義の経済的発展との関連を重視して、帝国主義を、資本家階級の必然的な利害政策としてとらえるものであった。つまり、この二つの帝国主義観の対立は、当時のプロイセン的ユンカー支配を頂点とする絶対主義体制と、あわせて独占資本の経済的支配というドイツ資本主義の錯綜した歴史的状況のなかにあって、基本的にまず民主主義をとるか、また社会主義をとるかという SPD 内での二つの集散的・政治的な路線論争を意味するものであった。

このようなシェーンランク対レーデブーアの論戦を契機とする SPD の帝国主義観の発展を、第 1 章は追求する。それははじめに、帝国主義＝前近代的遺制の利害政策という見地を進展させたカール・カウツキー説、またその変型の一つとしてのハインリッヒ・クノー説の解明としてあらわれ、さらに帝国主義＝資本家階級の必然的利害政策という見地に移行するカウツキー説、それをより推進させたマックス・ベアやヒルファディングなどの所説の検証として展開されていく。

つづいて、第 1 部の第 2 章「修正主義論争」は、19 世紀のおわりから 20 世紀のはじめにかけて SPD を中心にくりひろげられた、いわゆる修正主義論争を取りあつたものである。いうまでもないが、およそ産業資本主義段階から帝国主義段階への移行・発展にあたっては、マルクス『資本論』の論理からではただちに解明されえないようないくたの資本主義的新現象があらわれた。ちなみに、中間層の両極分解の停滞、労働者階級の実質賃金の上昇、恐慌の周期性の衰退、自由競争の制限＝独占の形成などがそれである。そしてここに、資本主義の新しい変貌過程に立脚して、マルクス学説の全般的な修正を提言する立場と、このような修正主義に対抗して、正統派マルクス主義を全面的に擁護する立場とのあいだで激しい論争が展開されることになったわけである。

じじつ、この修正主義論争は、弁証法、史的唯物論、価値論といったような基礎的諸問題から、資本主義的蓄積の一般的法則、恐慌論、はては SPD の任務と諸政策にいたるまで、きわめて多面的な分野にわたってその進展をみたものであるが、ここではとくに、帝国主義段階のもとでの資本主義崩壊論に焦点をしばって、この論争をとりあげていくことになる。すなわち、この作業は、修正派の巨匠エドアード・ベルンシュタインの所説の検討からはじまり、これに対する正統派の代表者クーノー、ローザ・ルクセンブルク、カウツキーの见解を順次対照させることをもっておわっている。これによって読者は、この修正主義論争が、「マルクス経済学の発展」にとっていかに重要なターニング・ポイントをなすものであるかを理解されることだろう⁽⁶⁾。

第2部「爛熟期の帝国主義段階とマルクス経済学」は、第1章「帝国主義論の諸潮流」、第2章「帝国主義と金融資本」、第3章「帝国主義と資本蓄積」とからなっている。

このうち、第1章は、その表題のしめすとおり、帝国主義論の諸潮流を総括的にとらえることを意図したものである。もちろん、たんに帝国主義論の系譜を追うということであれば、それは、帝国主義に対する政治的態度という視点から、帝国主義の对外政策を国内の社会政策とむすびつけて推進しようとする社会帝国主義論、また帝国主義に対して自由主義的で合理的な資本主義を対置する自由主義的帝国主義論、さらに帝国主義の流れに抗して社会主義を唱導するマルクス主義的帝国主義論などに区分することも可能なわけであるが、ここでは、この本の現代帝国主義論史的性格のうえにたって、もっぱら帝国主義論それ自体の形成を歴史的・理論的に追求するという視角から、「過少消費説にもとづく世界市場論的な帝国主義論」と「資本蓄積論的視角にたつ帝国主義論の流れ」とに大別して、さまざまな論者の主張が考察されている。すなわち、まえのグループに属するものとしては、ホブソン、カウツキー、パルヴス、ローザ、あとのグループに属するものとしては、ヒルファディング、ブハーリン、レーニンがそれぞれ登場することになる。

ところで、ヒルファディングの『金融資本論』が、大きく帝国主義の経済的基

(6) 第1部第3章「『資本論』体系の発展」は、きびしい紙幅の制約から、まったくの「むすび」としての提唱にとどまっているが、この第1部全体のねらいを確認する意味で、一読せられたい。